



# 統計スポット情報

No. 27

11.6.30

福井県総務部情報政策課

## おふくろの味からママの味へ

近年、外食化の進行、調理食品の浸透などにより、調理の素材の購入金額は減少傾向にあります。ここ最近では景気低迷の影響を受けてか、早々と帰宅し家で夕食を食べるお父さんの姿が多く見られるようになりました。では、その「家庭の味」はどう変わってきているのでしょうか。調理の脇役である調味料の購入金額から、その推移を見てみましょう。

図1 主な調味料の占める割合の推移

(福井市全世帯)

各調味料の調味料購入金額に占める割合(図1)で見ますと、昭和55年から平成9年の間で、マヨネーズやケチャップの割合がほとんど変わらないのに対し、しょうゆでは14.0%から8.4%へ、さとうでは6.2%から3.7%へと減少傾向が著しくなっています。

このように、以前の食卓では、味噌汁や煮物といった伝統的な味のものが多く並んでいたのに対し、最近では和食に限らず様々な料理が並んでいることが伺われます。

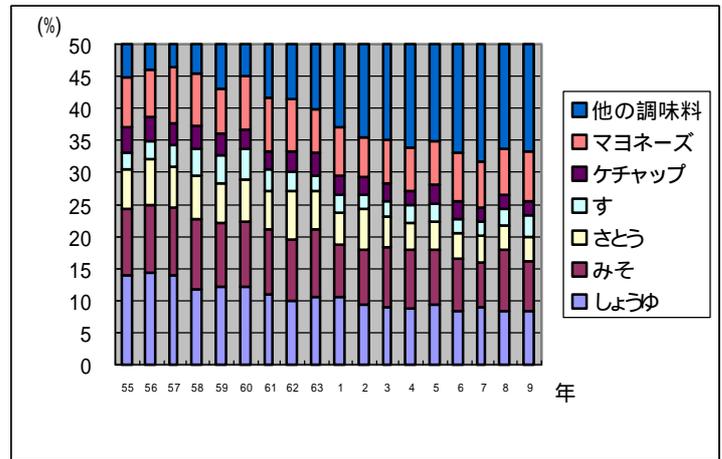
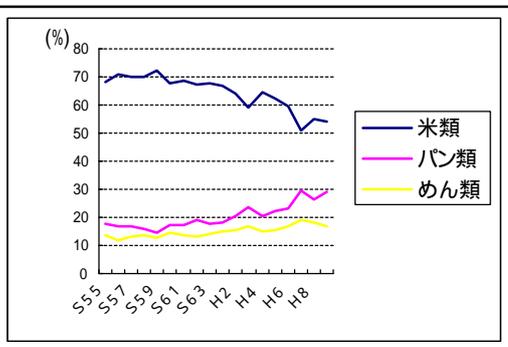


図2 主な主食の占める割合の推移

(福井市全世帯)



また、主な主食から見てみますと(図2)、昭和

55年から平成9年の間に、米類が68.4%から50.4%へと減少している一方で、パン類の占める割合は17.6%から27.0%へと伸び、主食として大きな位置を占めるようになったことがわかります。

おでん、きんぴら、煮っころがしなどなど、昔定番であった「おふくろの味」も時代とともにバラエティあふれる「ママの味」へと変わっているようです。

《参考資料：家計調査年報(昭和55年～平成9年)》